

今程、3名の意見発表がありました。2学期にかける思いがひしひしと感じられ、大変素敵な内容でした。1年生は、先輩方が築いてきた伝統をしっかりと受け継ぎ、授業や行事に励み、1学期よりレベルアップしたと言えるよう、目標を高く定め、実行して欲しいと思います。2年生は、部活動をリードするなど、学校の中心として活動する立場となります。また上級学校調べが始まるなど、卒業後の進路を本格的に考えて行く時期を迎えます。そして3年生。卒業への足音が日増しに感じられる頃となります。受験は「団体戦」と言います。自分の進む道をしっかりと定められるよう、授業を集中して受け、学力向上にみんなで励んで欲しいと思います。

さて皆さん。39日間の夏休みは、有意義に過ごせて心を豊かにできる期間となりましたか。この夏は東京オリンピック・パラリンピックが開催され、アスリートの活躍が多くの人々の感動を生んでいます。私も、競技者の姿や言葉、惜しくも敗北した選手や監督のコメントなどから、多くのことを学びました。中でも先日、東京パラリンピックの競泳男子100メートル自由形で、金メダルを獲得した鈴木孝幸(すずき たかゆき)選手には、とても感動しました。彼は、これまでパラリンピックに4度出場し、5個のメダルを手に行っている34歳のスイマーで、競技仲間から「レジェンド」つまり「伝説の人」と呼ばれています。レースでは、中間の50メートルをターンした時は、先頭を泳ぐイタリアの選手に体一つ以上開かれました。頑張りたいと願っていた私も「もはやこれまでか」との思いが巡ります。しかし、鈴木選手はあきらめませんでした。身長117センチ、体重45キロの体を十分に躍動させ、肘から先がない右腕、指が3本だけの左腕によるストロークと、付け根付近までしかない両脚によるキックをよどみなく続けながら、残り10メートル手前で並び、一気に抜き去りゴールしたのです。

10クラスある運動機能障害で4番目に重いクラスで戦う彼は、両腕がないため陸上トレーニングが難しく、環境を求め、自分を追い込むためにイギリスにわたり、その地で、あくなき向上心を発揮します。自分の部屋でチューブを使って腹筋を毎日強化します。全く妥協はしません。また、ターンの仕方を改良し、以前の縦から横回転とし、0秒14のタイム短縮に繋がります。自分の体をいかす知恵を食欲に追求するのです。レース後の鈴木選手は、こう語っています。「何かに取り組んでいる時に、成果や進歩を実感できると、やる気になる。その積み重ねで、ここまできた」パラリンピックの「パラ」にはギリシャ語で「並んで立つ」という意味があり、その精神は「失ったものを数えるな。残されたものを最大限にいかせ！」だそうです。努力と知恵を地道に積み上げた鈴木選手ばかりではなく、全力かつひたむきに生きるパラリンピックの選手達には、本当に頭が下がります。

さあ皆さん。弱音を吐き続けたり、うまく進まないからといって相手に強くあたったりすることはないですか。新型コロナウイルスの感染拡大にともない、社会が不安定かつ不透明となりやすい時代を生きている私達にとって、一人一人が今、何ができるか、何をすべきか、何をしてあげられるか、そして自分が今行おうと考えていることは相手の喜びやうれしさ、幸せにつながっていくのか。日々真剣に自らに問いかけ、判断しては進取果敢に実行に移し、結果には潔く責任をもつこと。そして簡単には諦めない「復元力」を磨き続けることが、令和時代をたくましく生き抜く力につながるものと信じているところです。

結びに、2学期は体育大会・学習発表会・合唱コンクールという大きな学校行事や新人大会があります。こうした節目を迎えるには、日々の感染予防が重要です。朝起きて体調に異変があれば登校を控えたり、仲間との会話ではマスクを正しくつけて適度な距離で話したりするなど、「自分と大切な人を守る」という気持ちを常に持ちながら生活を行いましょ。心も体も大きく成長する学期となることを期待して、式辞とします。